国際研究論叢　16（2）：353～364，2003

【意訳論文】神道神話における宇宙生成の神的計画

ヴィエスワフ・コタンスキ
松　井　嘉　和　訳*

A Divine Plan Presented in the Shinto Cosmology Written in Polish by Wieslaw Kotanski, Translated into Japanese by Yoshikazu Matsui,

Yoshikazu Matsui*

Abstract

Original paper of this translation was prepared for the lecture on the occasion of an academic festival at the Warsaw University in 1997 and later published in the booklet entitled "Festiwal Nauki 1997" compiled by the Oriental Institute of the University in Poland. This Lecture was focused on a structure of the pantheon of the deities of the Shinto Religion. Dr. Kotanski discussed on religious meaning of the Cosmology by decoding the meaning of the names of divine beings appeared at the first stage in the Japanese Myth. He stressed that Shinto pantheon was established in order to inform the ancient Japanese people that each deities had the vocation to make this world better situation, more beautiful and more lucking, and to teach to live on the way traced for them by the deities. That was the purpose of the divine plan of the gods in the Japanese Mythology.

キーワード
神道神話／造物主／イザナギ・イザナミ／ウマシアシカビヒコジ
神々の役割

＊まつい　よしかず：大阪国際大学法政経学部教授〈2002.11.15受理〉

意訳論文

神道神話における宇宙生成の神的計画

ヴィエスワフ・コタンスキ
松井嘉和 訳

〈神道の世界観〉

神道は、日本に固有の多神教の宗教の呼称であり、また民族的な多数の神々の信仰と言われていて、歩むべき多様な小道として示された神々の道標だと説明できる宗教である。その神々は、六世紀に大陸から移入されて、今は日本列島の三分の一ほどの人々から信仰されるようになっている仏教という宗教のはるか以前から、日本列島に出現していた。

神道宗教は教説の発展には意を注いでは来なかった。その教義に乏しい宗教が強固に存続してきているのは、主として、幾世紀にも渉って人々の習慣と結びついている多種多彩な伝統の存在とその伝統に対する人々の深く根を下ろした支持に基盤を置いているからである。しかし、最近はどちらかというとその基盤を弱める風潮がある。

日本の民族とその統治者達は、八世紀に文字に書き残された神道宗教の神話の中にともに不可欠な構成要素として描かれている〈注1〉。その神話は、日本の島々が、一対の造物主すなわちイザナギとイザナミという二神（以後、この二柱の神々を「岐美二神」と呼ぶ）の直接の子孫であり、世界を構成する神々そして天皇と土着の日本人と共通の祖先をもっている（神話では本当にそういう考えなのだ！）ことを認めている。これらすべての存在は、すでに生み出されている陸地の上で世界を構築して行くために様々なそれぞれの課題を担っている。

このような考え方があったのは、明らかに、自分たちはどのような世界に生きているのだろうか、という問題について納得を得たがっていた人々がいて、神話はその解答であって、基本的な教訓であったことを示している。こうして、人々は、岐美二神の一対の両親から生まれ出て、統一した共同体の成員として、ある大きな家族にも似た世界に生きている、という理解を得たのである。

島々の誕生が語られている神話は、おそらくアニミズムの前段階の信仰形態に属する、と考えられるだろう。この段階を私は、本論の作業上の仮説として、生命主義（vitalism）と呼んでおく。それは、どんな自然の物事にも生命があると考える傾向のことで、誕生によって始まり、死がその終わりとなっている考え方である。それだから、神話の制作者達が島々の誕生のあり方を記述する際に、世界の構築者が一対の夫婦になっていることに、注目したいと思う。つまり、島々を生んだのは、岐美二神の宇宙生成事業の第一歩に過ぎないのであって、神話では、世界構築の任務は、天上に居住地がある神々のグループが、造物主であるこの一対の神々に委託していることに注目したいのである。

〈造物主である岐美二神の使命〉

私は、その岐美二神を、日本神話の宇宙生成事業の主役であることから、造物主と捉えている。造物主である岐美二神もやはり天上の住民であって、天上に居住する神々のグループが天の下の世界を秩序立てるために、この二神を天の下の世界へと派遣した。ということはつまり、天の下では混沌、混乱が支配していたということだ。混沌も、なるほど天上界で時を過ごしている天之御中主之神によって代表されていたが（注2）、しかし、混沌状態は天上での支配的な秩序に矛盾することである。だから、天は至る所で混沌に打ち克とうとする努力を払うのである。だから、天の命令が天上にいた造物主達に発せられた。命令は次の通りである。「至高の指令に従いながら、激しく揺れ動く固定しない地域に形態をもたらし、相互依存の状態を完璧にしなければならない（理りを修め、この漂える国を固め成せ）。」

続いて、ペアーの造物主である岐美二神は、天上の命令に即応して、意図的に選ばれていたことが明らかになる。というのは、その一対の神々の名称自体が世界の形態を形成するという任務を語っているからである。夫はイザナギという名で、これは「聖なる形態を調整する夫」と理解することが可能で、その妻イザナミの名は「継続する聖なる形態の構築を容認する女性」と解釈できるのである〈注3〉。

この二神の名前それ自体からは、世界の混沌とした情況に対する対応、例えば、うち砕いたり、切り割いたり、一掃したり、変容させたり、慰撫したり等々をする実務者の役割が述べられているのではなく、この二神は、むしろ指令者あるいは計画立案者としての任務に相応しい、と判断することができる。つまり、夫が乱雑な物質を固め成すことを計画して周囲の環境と調和するように尽力し、それによって、妻がその計画を受け入れるかどうか、確認するわけである。また、原初から、天上の命

令には、形成される形態は完全でなければならないという予定があり、そのために何か出来の悪いことがあれば、補正するということになっている。人の不断の努力なしでは理想的な結果はないのだから、仕事の前には計画を練り、見事にやり遂げた後でも、それが悪くならないように常に理想的な結果を目指して努力していなければならないということになる。そこで、さらに、それが生きるときのすぐれた教訓となっているのである。

一方、この造物主達は、机の前に座りながら理想的な結果の計画を立てたりする者ではない。イザナギとイザナミは、空間の建築者つまり列島空間を現実の形に組織化し形成しなければならない使命をもった息の合ったペアーであり、住民達にとっては精神的かつ物質的な安定化にとって不可欠な存在なのである。もちろん神話構築者が大前提としているのは、生命主義というその時代の基本的な常識であり、生命主義とは、おもに自然そして昔は今日よりも頻繁に起こっていた天災の解釈に深く関わりがある。この考えでは、自然つまり山や谷、川や湾、草原や森の植物、太陽や月等々のすべては、島々を飾り立てているものであると同時に島々に存在しているあらゆる快適さや効用を提供しているものとなっている。その一方で、旱魃や洪水、暴風雨や雷、危険な自然の力としての火や水、真っ暗闇で五里霧中の状態、気力阻喪の状態や不幸などの災害があるのは、一般的に言って、自然がまだすべて理想的な平静さや調和がとれていない状態にあるからだと考えることができる。つまり、それは世界の美しさや有効性がないから起ったのであって、存在するものの不完全さやそれぞれの形における悪い状態が生じ、それを克服する可能性について熟考する格好の材料となっている。

〈天上の指令を実現する道筋〉

とは言っても、ただ岐美二神の造物主だけが自然の万華鏡つまり美しさや恐ろしい天災など様々な色合いのある現実世界の隅々までもの変化の世話をしているわけではなく、神話では明らかに、造物主達の子供達あるいはその孫や曾孫またさらにその子供達と続く一連の系統の神々が、日本列島の建設を成就する有効な作業に従事することになっている。

このように次から次へと受け継がれて任務が達成されるような手順になっているのだから、結局、代々の神々が、予定された目的の達成のために同じように取り組んで、影響を及ぼしている組織化された階層的な構造の共同体ができあがっているということになる。すなわち、神々は、そうした構造の中で、日本列島におけるありとしあらゆる領域が調和して発展して立派になるように監督する任務を果たさなければならないような

っているということである。幾百の神々のこのような共同作業が神話の具体的な記述の中に見いだされるのは、上記のような共同体の理念が幾世紀も前に賢い人々によって引き出されたか、あるいは予見者によって予言されたかして共有されて存在してきたと見なすことができる。しかも、日本ではこの理念は社会の伝承の中に今日までも生き残っているのである。

天上の命令の実現のための道筋は、かならずしも常に一直線の系統になっているわけではなく、共同体の階層的で多岐な構造が任務を次々に伝達して行くその道筋を提供している。それで、天の命令が受け継がれて行く道筋の究極の段階に至れば、未曾有の開化の状態が導かれることになる。

ところで、神話において、その構造の内的絆や編成とか構成とかが一体何に依存しているのかを考えるときに、右に述べた共同体の階層的な構造の根拠を一瞥しておく意義は理解できよう。

その根拠の要素として最もはっきりしているのは世代ごとの階層である。日本の伝統では、子供に対する両親の権威がひじょうに高く置かれていて、神話の中で、それに関する言及が頻繁に見られる。だが、その権威の強調という家族の伝統は、最終的にはアニミズムの段階で形成されたものだと考えてよい。それ以前では、どちらかと言えば、もっとゆったりとした家族関係が支配的であった。その形態の例は、神話の中から言及することができるが、個々の事例では、いずれにせよ、大まかに言って母系制であり多婚の形となっている。また、偶然の恋の出会いが多く見られる。それは、夜這いや歌垣などの習慣があったように、男性が伴侶を探すことになった場合、うまくいった数回の出会いの夜のあとで、ある特定の同伴の伴侶として候補者が決められていたことである。これは、日本神話を研究しているポーランドの日本研究者トゥビィェレビッチ(Tubielewicz)氏が書いているように、「ある神は、父あるいは祖父また曾祖父の子孫と関係があった」(注4)からである。以上のように家族関係において階層や不均衡な状況がある中で、好都合だったのは、古代人はたいていの場合には神々の年齢を数えることなく問わなかったことである。その古代の人々の信念によって、時の経過とともに普通は神の力は衰えるものだが、時がいくら猛威をふるっても、神々の性的活力は損なわれることなく保持され、神々は幾世代を経ても活力をつねに保っていたのだと思われる。

短い文章の中で、この複雑な分野に申し分のない特徴付けを行うことは難しいので、今は、ただ、その中で支配的な一般的な無秩序の描写について述べているだけである。いずれにせよ結婚の体系が改変してきた仕方を知ることは簡単なことではなかった。

しかし、すでに見てきたように、神話の中では、天上は世界

の秩序化を分担する一族として主要な役割を担うことが認められていた。神話が形成されたころ、任務の分担の問題が生じていた。任務というのは、さらに生じてくるこの世界の欠陥に対する治療であることがはっきりとしている。造物主の岐美二神の子孫の一族が計画していた細目はすぐに継続させなければならなかったのであり、この考え方は任務を担う集団組織の原型だと考えることができる。

その組織は、神々の階層的ピラミッドを範型としていて、天上の居住者がいる頂点から下される命令が、ピラミッドの下方に様々な種類の道筋によって指示されてくるというものであったし、それは徐々にさらに低い神の階層へと下り、ついには基層にまで辿り着く。その基層とは、現場の実行者が中央からの命令を直接に受け取る場なのである。

私自身の考えでは、任務に参加する一族すべてが何の誤りもなく働く場合には、天まで達するようなピラミッド型の階層構造を築かなければならない、と考えるのは、どちらかというと神話的なユートピア的考え方ではないかと思う。すべての一族が参加して誤りなく役目を果たさせること自体がその構造の設計者の主要な使命ではなかった。そのピラミッドのように計画立案者を司令部として、全ての部局が誤りなく仕事を果たすのは、ただ、方略の条件に過ぎないのであって、神話の示している目的というのは、すでに述べたとおり、世界のあらゆる存在に調和をもたらし、進歩するように監督して、世界を秩序化して完璧にすることにあったのである。

その目的の達成のために岐美二神が天上から派遣され、しかも、地上の環境を整備する二神の能力が強調されていた。それにもかかわらず、見込まれた時間内でいっそうよりよく状況を改善させるには、あまりにも時間がなかった。そこで、その後の環境の改善は、造物主の仕事を受け継ぐ神として生まれてくるその二神の子供達が果たして行くという考え方が浮かんできたのである。そこで、実行者の採用や地質技術の新しい工夫が幾世代にわたって実行されることになるのだろうと思われる。ただ、任務の実際の遂行が、単一の指示もなく、ばらばらに進んで行く個々の指導の間の協力もなく、計画がないままにどんどん進められていったのだろう。こうした出たとこ勝負のやりかたは、神話の中では、瞬時も配慮されて統御されることなく続いていったのだろうと推測される。

だが、造物主である岐美二神は、全宇宙がそれに従属している少なくとも五柱の神々が天上の世界に拠点をもっていることを知った。

〈神々の任務ーウマシアシカビヒコヂの場合〉

本稿では、説明の流れを拡散させないためにも、ここからそ

の五柱の神々のすべてについては考察の対象とはしないで、その一神であるウマシアシカビヒコヂについてだけ有益な説明を示したいと思っている。

この神は、いったい何のために生まれた神だろうか。神名の形態分析から、私は、この神は「埋没されたり醜悪になったりしたものに活力を与えたり祓いをしたりする霊力を引き入れて集め、様々な神に散布する神霊」という意味だと解読している〈注5〉。つまり、宇宙において混沌によって生じる結果を無にする目的を持った神というわけである。一方、天の至高の命令によって、造物主の二神は天下の無秩序を秩序化する義務をもっていた。では、なぜ、ウマシアシカビヒコヂが造物主にならないで、岐美二神が造物主となったのであろうか。この問題に対して、暫定的なものになるだろうが、解答を試みてみたい

日本神話が、物質的宇宙の混乱は審美的な活動によって排除することができる、と明瞭に示していることは間違いない。審美的な活動とは、美を広め、調和を普及させ、世界を完璧にする技巧や美的感覚を呼び起こすことである。そのような前提にたって、岐美という夫婦の対偶神を世界の建設者として天下に送り出すことは、まったく合理的な選択であったと思われる。二神の名に含まれている「イ＋ザン＋ナグ＋ギ」と「イ＋ザン＋ナン＋ミ」という形態素の意味を「齋＋様＋和＋翁」、「齋＋様＋並＋嫗」と解読すれば、その理由が見事に明るみに出るだろう。つまり、この二神は「聖なる形態を調整する」「聖なる形態を容認する」という役割があることが結論として導き出され、「形態を調整したり容認したりする」のは地上のカオスを修繕することを意味するからである〈注3参照〉。そして、もし、イザナギとイザナミのこの働きが実現するならば、ウマシアシカビヒコヂの活力を与えたり祓いをする霊力は不要となるかも知れない。

日本人が早くからウマシアシカビヒコヂの崇拝を忘れていたのは歴史的事実である。神話の中にその名前だけは残されてきたが、神々の体系におけるその役割、神的構造の中でのその位置づけは忘れ去られていた。今、長い間、多くの研究者によって無視されてきた日本の神的体系におけるこの神の役割を解明するときである。

このウマシアシカビヒコヂの神の役割は、祓いをしたりして霊力を配布し、まき散らして他に活力をもたらすということだが、誰に何のために配布するのだろうか。霊力が果たす役割は何であろうか。この問題を考えるときに、その名のヒコヂという要素が参考になる。ヒコの意味を漢字で表示するなら「引」で、集めてそれを配布する、活力をもたらすということである。そして、その対象がヒつまり「霊」だから、集められて配布されるのは「霊」である。ウマシという名の意味は「埋」で、混沌の中に沈んでいる何ものかを示している。そこで、混沌つま

り堕落者の心の中に入って、祓いを果たすカミということになる。では、ウマシアシカビヒコヂは、そのような霊力を与える活動を可能とするのだろうか。従来、何のために、誰のためにこの神が存在してるのかという問題は具体的に解明されてこなかった。この神は、それだけでは、混沌の消滅をもたらすことはなく、霊力を「集め」て「誰かに何か仕事を与えて、割り当てる」のであるが、いったい誰にどんな仕事を与えるのだろうか。

神話では、混沌を秩序立てる仕事は、夫婦の神々に与えられた。だから、一対の造物主が登場し、続いて、それと同じ生存形態の対の神々が次々に誕生して、その対の神々にその仕事が割り当てられていた。

子供の獲得は、神話が教えているように、それにふさわしい儀式を間違いなく実践するかどうかにかかっている。岐美の二神の発言は、もっぱら子供の誕生に関わっているので、二人の行った行動が、子供を願望する儀式であることは明らかだ。この儀式の根幹は「柱を巡り歩くこと」である。この儀式について、何を象徴しているのか、なぜ儀式のやり直しが描かれているか、などの疑問が今日までに問題とされてきている。その最も一般的となっている解答の一つに、柱は神が天から降ってくる道として役に立つものであり、柱の出現は、天上の神々の出現の予兆となっている、という解釈がある。

このことを考え合わせると、ウマシアシカビヒコヂつまり「崩壊をくい止める力をかき集めて散布する神」は、天の下が海になる前に満ち満ちていた混沌の世界の根底から伸びてきた巨大な「葦牙の如く萌え騰る物」つまり「植物が生長して、葉や茎や花になる部分」から姿を現したということが示されていることになる。太古の植物分類の体系は精緻ではなかったことが知られていて、現在「葦」として知られている言葉は、例えば、高いことを連想させる広い葉をもっている植物の茎や堅い棒や柱など水辺に生息して水によって成長する植物を意味していた。それは、また同時に、無数の毛のある花びらから成っている厚い綿毛に覆われた形の花穂があって、種をばらまいて素早く遠くまで繁殖させる植物も連想させている。この後者の働きは、多くの分野に広がって子孫を保証する夫婦の神にとって、理想的な働きである。

子供達は、この世をよくするため、天上の神が命じた課題を達成するために生まれてくる。その仕事は、子供達が自分で自由に選んだのではなく、天が命じた天下の秩序化という計画に即して、生まれてきたのであり、その役割は与えられた名前によって示されている。世界構築の仕事におけるそれぞれの神の役割は、その名に示されているということである。つまり、神名は、個々の神々に指定された世界における役割の内容を現わしていて、名前の言語形態は、言葉の霊的な威力によって顕現

する神々の役割を示しているのである。神話のなかで神々が示している行動は、たとえ与えられた名前の意義が背後に秘められていて明瞭に示されていないとしても、その名が伝えている役割を果たす行動なのである。

また、次のように言うこともできるだろう。つまり、日本の神話では、霊力をもった存在は、部分的な任務を果たすためのプログラムが与えられている。そして、その任務とは、宇宙の発展の計画に即していて、それは父母という親によって現実化されているのだ、と。

ウマシアシカビヒコヂの名を日本語の語構成原理に基づいて形態分析した結論を、このような前提に立って再考した結果、既述の通り、この名の意義は「埋没されたり醜悪になったりしたものに活力を与えたり祓いをしたりする霊力を引き入れて集め、様々な神に散布する神霊」となり、ウマシアシカビヒコヂは、向上心を生み出す役割も担っているのだ。

個々の神は、タカミムスヒが統一して管理する天上の神の計画全体の一部を担っているわけだが、その役割はアメノコヤネによって割り振りがなされ、ウマシアシカビヒコヂによって向上心をもらって、自己の使命を果たすことができるようになっている。この意味から、ウマシアシカビヒコヂの働きがなければ、世界の完璧化という天上の神の指令を実現させることができないことになるだろう。ここに、ウマシアシカビヒコヂの存在意義がある。

しかし、この神は、霊力を引き寄せて集める力はあるものの、自分自身では霊力を生み出す力はもっていない。使命を果たす神々は、たしかに自分自身の能力では霊力を形成することはできないのだが、地上世界で与えられた使命をやり遂げる運命にある。その使命の指定は、神々の名称とその意味を配置し、天上の神の計画全体のそれぞれの役割を分担させる部局が担っている。その部局は、「統合の霊」と解釈できるタカミムスヒが統括している。

〈天上の神の計画とその実現過程〉

神々の役目を統一するタカミムスヒに少なくとも二十三柱の実行者が仕えている（注6）。それらの神々の相互関係、共同作業がどのような経過を経て行われるのかは、神話には明示的には書かれていないが、造物主の二神の子供達がそれを受け継いでいることは明らかである。

今、ここでは、それらのなかで、もっとも知られている一族だけにかぎって言及することにしよう。

まず、アメノオモヒカネは、天上の思索を鼓舞して徹底的に究明する霊である。その子息あるいは子孫だという証拠はないのだが、そのように考えられる神にコゴトムスヒがいる。この

神は、言葉への興味を喚起させる霊であり、言葉の霊力（コトダマ）の役割と関係があるか同一であると考えられる。その血統の先に天上の神々の名が変質しないように保ったり改善することを決定する霊であるアメノコヤネがいる。ここでは、命名者によってアメノコヤネと指定されて認められた名称が、子供の両親によって決められ、続いて、コゴトムスヒという言葉の霊力の神によって、その名が適切であるか需要に即しているかが検証されて、名前が確定される。それによって初めて霊力が発揮されることになったのだ。霊力の発揮は、降った地上で、与えられた名称の内容の通りにこの世の世界を形成させる個々の子孫の神々に、名前の示す役割が賦与されているから可能なのである。

日本神話の神々の役割を私は、暫定的に以上のように考えている。

神道神話における宇宙の発展の計画という複雑きわまりないメカニズムについて、本稿は、簡単な考察を示すことができただけである。神道神話の世界は、不必要なバネやネジや小さな歯車などは一つもなく、すべての部品が全体の規則正しい動きに関わりをもっている時計のようなもので、十分に熟慮された全体像をもっている。太古の時代には、この世を形成し、地上に有益な生活をもたらし、行動の究極の目的が全体の福利を目指すことが構想されていたのは確かなことだろう。天は、自分の命令の中に宇宙の混沌を消滅させるように任命された霊力の戦闘部隊をもっている。そして、天神の最高の命令に一致して造物主の岐美二神は、天の下の地上の無秩序を正常化させることになっているのである。

造物主の岐美二神が国々を生んだ後の子孫の神々、オホコトオシヲ以下、海の神オホワタツミなどの系譜に連なる神々についても、もちろん私自身は、以上の視点からの解釈を試みているが、ここでは省略したい。

訳注

注1　原著者コタンスキ博士の研究の中心は『古事記』の解読にあるのだが、この「八世紀に文字に書き残された神道宗教の神話」とは、言うまでもなく、和銅五年（七一二）の『古事記』だけではなく養老四年（七二〇）の『日本書紀』も想定された言及で、本稿の執筆に当たってコタンスキ博士が『大日本神名辞書』（注6参照）などを参照しているように、記紀神話に限らず広い意味での日本の神話が想定されていると考えてよいだろう。

注2　天之御中主之神が天上にいる存在であることには従来の解釈でも異論のないところだろうが、この神が混沌を代表しているという解釈には説明を要することだろう。この解釈の根拠をもっともわかりやすく書かれた邦文の論文は『神霊研究』という雑誌に掲載された講演筆録「原初に現れた神々の天命」だろう（同誌六四一号、平成十二年七月）。大半の人々にとって同誌を目にする機会は多くはないと思われるので、そこでのコタンスキ博士の考えを解説しつつ、その記述を引用しておきたい。

まず、この神が混沌の中に出現したことをコタンスキ博士は重視する。その時点の状態では、天も中も存在しないし、この神が天とその中心を構築したわけではないことから、漢字の示す意味に疑問を呈して、この神の形態素を、'aman-nom-mi-na-kan-musi と分析し、その意味を「普延膿無兼蒸」と解読したのである。そして、次のようにこの神の本性を定めた。以下が講演筆録からの引用である。

何か課題があると、神様はある部分を〝活かす〟わけです。また別のある神様はほかの部分を活かす。ではこの《普延膿無兼蒸》は何を活かすかというと、まず第一に「膿（＝腐敗）」と「無（不存在）」を進める。そして、この「膿」と「無」との二つの現象をどこにでも延ばしてゆく役割を担っており、反対する勢力がなければ、この神様は全世界、〝全宇宙の腐敗と不存在〟の支配者となる力を有していると考えられるのです。この「膿」の意味する〝腐敗〟こそ、混沌を生む代表的なものに他ならないわけです。

こうした《普延膿無兼蒸》の神に反対する勢力、それは他の神々であり、彼らはそれぞれ、混沌の状態からある部分を取って、それを活かします。本当に活かすのです。いいものにする、使うためのものにするのです。《天之御中主（↑普延膿無兼蒸）》の神だけが〝不存在と膿〟をつくり、混沌を支える守護神となります。次から登場する神様は混沌からある部分を取ってよくします。ですから世界は混沌にはなりません。（中略）〝混沌と不存在〟は同時にまた〝更新や変化を生むための基盤〟でもあり、それを支える本当に重要な役割を担う《天之御中主（↑普延膿無兼蒸）》の神は、不必要な神様ではなく、絶対に不可欠な神なのです。

注3　岐美二神をこのように解釈する根拠つまりコタンスキ博士の神名の解釈の方法の基本的立場を、訳者として簡単に紹介しておこう。もちろん、この方法論は、また、注2で紹介した神名の解釈にも一貫して通じているのである。それは、以下のようにまとめることができる。①『古事記』を解読する時には、表記された漢字の意味にとらわれてはならない。とくに神名や人名の場合にはそうである。②上代には固有名詞を明示することがはばかられたので、名称の意味が明示的に示されていないことが想定される上に、漢字表記の背後に隠された音およびその音によって示された意味は時代の経過とともにわからなくなってしまったことを思い合わせると、個々の神名の意味を理解して、その役割を読み取るためには、名辞の背後に隠された意味の解読が重要になる。だから、国語学の成果である日本語の語構成の原理に基づいて、能う限りの原型に近い音を再現し、最小の意味単位である形態素を摘出し、そこから始源の意味を読みとらなければならない。従って、名称の形態素の確定が重要となっている。③登場する神々はそれぞれ役割をもつことによって世界を形成させる不可欠な部分となっていて、その個々の役割は神名そのものに暗示されている。

この原則から、岐美二神は、形態素として、i-zan-nag-gi および i-zan-nam-mi と分析でき、その意味を漢字で示すと　齋（イ）＋様（ザン）＋翁（ギ）と齋（イ）＋様（ザン）＋並（ナミ）＋嫗（ミ）と考えられて、ここに記述した意味となる。

さらに詳しい方法論とその具体的な展開は、松井嘉和訳「『古事記』における神名と人名に伴う属名」（『大阪国際大学紀要・国際研究論叢』第6巻第一号及び同誌第7巻第一号　一九九四）や松井嘉和訳「日本神話にみられる名称のコンピューターによる分析」（『亜細亜大学アジア研究所紀要』十六・十七号　一九八九、一九九〇）をはじめとする諸論考を見ていただきたい。

注4　Jolanta Tubielewicz "Japonia," Maria Frankowska "*Aztekowie*," "Mitologia i seks" pod redakcja Kazimierza Imielinskiego, Warszawa 1993, Wydawnictwa Szkolne Pedagogiczne.（トゥビィェレビッチ・ヨランタ「日本」およびフランコフスカ・マリア「アズテカ族」参照。カジミエジ・イエミリンスキ編『神話と性活動』ワルシャワ、学校教育出版　一九九三　所収）

注5　この神名の形態素は、wumasi-as-ik-abi-f-fiko-diと抽出され、その意味は、「理＋悪＋活＋浴＋霊＋引＋霊」という漢字をあてて示すことができて、本文に記述した通りの解釈となる。本稿では、形態素の声調の区別を記していないが、分析に当たっては、声調の吟味が欠かせず、意味確定に当たっても配慮していることを付言しておく。

注6　この二十三という数は、『大日本神名辞書』（椙社吉次著　大正元年　厳松堂）の神統譜に、高産霊神の子と孫として総計二十三柱の神々が記述されていることに基づいている。同書によれば、それは、『古語拾遺』と『旧事本紀』等に基づく系譜だそうだが、『古事記』にはそうした系譜は記述されていないにせよ、日本の神道神話の歴史の中には、こうした親子関係が考えられていたことが知られるわけである。

解説

本稿は、一九九七年夏、ワルシャワ大学で開かれたFestiwal Nauki（学術祭り）における記念講演の記録を翻訳しつつ、そこにコタンスキ博士の『古事記』に対する基本的な考えかたを補足してまとめた論文である。その年の「学術まつり」においては、宗教をテーマとした一連の講義が行われ、記録集には、道教や仏教などの講演録も収められている。この講演にも見られる博士の日本神話と神道の独自の解釈は、日本人にとっても刺激的な示唆を含むものだと思われるので、ここに紹介することにした。

本稿は、刊行されたポーランド語の文章を日本文に置き換えた記述とはなっていないので、厳密な意味では翻訳とは言えない。例えば、翻訳に残しておいたように、ポーランドの日本研究者の解釈に言及されているなど、聴講対象としてポーランド人を意識したものであって、冒頭の一節には「神道をポーランド語で説明すれば」という一句があったが、日本人を読者対象とした本稿では、一般的に「説明できる」という表現にしていること、あるいは（注3）の原文では十六という数字が印刷されていたが、原著者の指摘により二十三に改めたなど、原著者と協議の上、改変を加えている点が多い。とくに訳者が〈神々の任務ーウマシアシカビヒコヂの場合〉とした節のウマシアシカビヒコヂの解釈について、原文では、『古事記』に述べられているウマシアシカビヒコヂとそれ以下に生まれている対偶神の解釈が提示されているが、それらの神々の扱いは、訳者が原著者と元原稿を読んでいた際にコタンスキ博士から訳者に示された解釈のメモに基づいて、博士の解釈の微妙な変更を加味しつつ翻訳文を確定している。この点は大きな改変箇所だと断っておかなければならないだろう。言い換えるなら、翻訳でウマシアシカビヒコヂについて原文には見られない解釈の仕方を加えている関係上、その後に生成した神々の解釈との整合性を整えた解釈を示す必要があるという理由と、本稿の記述によって、本稿の課題である「神道神話における宇宙生成の神的計画」に関するコタンスキ博士の考えを伝えるに十分だろうという判断から、原文の末尾のその神々の解釈の部分の扱いは講演筆録の原文とは大きく異なっているということである。つまり、この翻訳は、とくに後半部分は大きく改変が加えられていること、また、文中の小見出しは原文にはないことを申し添え、これらの改変は、訳者の判断により提案し、原著者の了解を得て決定したことを付記しておく。